

A Report on *Mari no Engi*

Yukio OSHIMA

『鞠之縁起』について

Kemari(蹴鞠) is a traditional ball game in Japan, in which there are many rules and manners to be observed. Since the time *Kemari* was introduced from China to Japan in the Nara period, it developed independently in Japan. Rules and manners concerning *Kemari* were gradually improved, and were systematized in the Kamakura period. After then, *Kemari* master gave his pupils a written material that contained explanations of the rules, the techniques and the manners.

Mari no Engi(鞠之縁起) in my possession is one of those variants of explanation text, which was copied by hand in the second half of the Edo period. The contents include not only the rules, the techniques and the manners, but also include the legendary origin and history of *Kemari*. The text shows how the custom of *Kemari* has been handed down in the tradition from generation to generation.

In this paper, I reprint the text and give a commentary on it.

ひかね候ハ、脇より取ヘシ、

左リ足、地をはなして運事、嫌ふ也、土きわをはこふ物なり、中に受てはこふを高をとるといふなり、

いたらぬ内に、沓ねをけ候など、なつむ事、あしく候、稽古のおさへになる物なり、沓音ハ、鞠たけ次第、出候物なり、

同到もせて、鞠を近くけ候など、望候事、第一おさへなり、鞠につり合出ぬ物なり、切者に成、鞠の出合能、つり合能ければ、遠くけたくとも、近くなる物なり、

相手に上手下手の嫌ひなく蹴ヘシ、相手をきらひ候ヘハ、不達者になるもの也、下手をもすゝめて相手に成、すくい候事、一しうの掟也、是、鞠の繁昌のため、飛鳥井殿へ御奉公也、

上手事、蹴候ヘハ、鞠すくみてあかりかぬるなり、下手とけ候てくつろぎ、一はいをけ候ヘハ、そこにて上るなり、

毎日心掛、五足十足なり共嗜、一人にて稽古いたし、沓心を覚ヘ、尤身構ヘ、氣のたるまぬ所を知るヘシ、

一足くけ候とも、そまつに蹴候事ハおさへなり、

貴人高人の御手を付たる鞠は、あつと腰をかゝめ、鞠により手を付けヘシ、御顔、肩などへあたりたるも同前也、手にとりて上候ヘハ、拍子ぬけゝるまゝ、手に受るまねをして蹴るなり、

上面に立、貴人見物の時、うしろむきたる、立ひろかりけぬ物なり、幾度もかいしきてけいたす物なり、何方に貴人御座候とも、其方に立候ハ、其心得第一也、

貴人の前に立人、庭の様子により、少一方へよりて立物なり、同は右へ寄ヘシ、まん中へ立候事、あしく候、

鞠見物の時、はなしすへからず、能鞠出候時、感して誉候物なり、けなから相手のほめ候事なかれ、

鞠中ばに、け候者と物いふ事なかれ、我鞠不出来なり共、知らぬ顔にてつめをけて、沓にのるを待なり、でかしなど、いて候ヘハりきみ、相手の鞠も悪くなる也、

鞠ひたとそれ候時、其色を見すへからず、不出来の色見ヘ候ヘハ、脇もしまぬ物なり、

鞠しづまり過候ハ、情を出し、はり合能けヘシ、此時こそ声を繁くかけ候物也、あまり氣をい過候ハ、しつめヘシ、此見合肝要なり、是をきをいおくれ

を取と云也、

いつもべんくたらりと蹴候ハ、下手也、
鞠の内、我身に心を付、折く衣紋を匡し可申候、とりわけ、くるいたる鞠に骨を折申候ヘハ、衣紋みたるゝ物なり、

か、また重てハ三ツ、又は、蹴上^ケたるハなかし、かは、まはりか同しやうに蹴候てハ見所なし、

立わかれ 一切に一ツか能^ニて二ツか

まはり 一切に二ツか三ツか

かしいき 同前

のべ 一度か二度か

なかしは、鞠をたすけ候まゝ定らぬなり、鞠を取納候程有べし、一切に少しまへたりとも、其日の上客など、風の出来、鞠有てあつと申程見事に候ハ、其内の切者か、又は向に有人、取候者なり、か様^ニ納候へハ、其暮ハみな其御方の鞠とはかり見へ申者なり、

貴人高人は座鋪の方に御座候もの^ニて、是を上面と言なり、同輩にても上手を置ものなり、其向を上表面といふなり、上手の立所なり、望^ニ候は貴人たりとも向表面に有へし、

掛^リの内は、四間半四方にしてよし、下手の鞠、不達者の鞠にてはあくむものなり、されは、四間四面にして上となり、

掛の木は、松楓柳桜を植へし、鞠を入候時分、向表面の左^リの木の根方ころはすなり、鞠座の真中に居候様、心へし、

貴人か珍客、賞翫の人あそはし候ハ、つめ事蹴へし、我鞠でかし候半とおもふは、大^キにあやまりなり、高足を蹴候とも、時分あいしらい蹴候ものなり、我同輩せりあひの鞠ハ各別なり、

掛^リの木の内を通るへからす、

鞠蹴に初て入候時分、先、向表面の人、先^江入、右の掛の木のかたへ近寄つゝはい居なり、今一人ハ上面の左へ向、上面の後^ロを通り、縁のきわの木へ近寄居なり、三人めは右のかたへ出、右の木へ近寄居る也、さて、上面の人出、つくばい候ハ、向より出鞠をとり、うしろへ開き、目と目を見合、一度に立上^リ、鞠すへし、

上面、貴人高人ならば、上^ケ鞠すくに渡すへからす、左^リ上面へわたし、さて、左^リ上面方本の上面へわたしへし、

本上面も向表面も高人ならハ、左^リへ立候者、上鞠すへし、左^リも高人ならハ、右の人、上へし、見合すへし、

鞠をとり納候事、大概客のとり候物なり、亭主かたより取候事、不仕付なり、鞠取納、貴人か高人ハ、其まゝ捨候もの也、御出候内は、三人ともに本の座につくはい待合、御出候跡方、入口の勝手により、其方の人、先へ出、それにつゝ

きて出候ものなり、貴人、老人にても二人にても、先、其御方、御出の跡より出申もの也、

蹴上の事、鞠に目を付、一ツも二ツもうけ、身をけはなし、其拍子に左の足を踏込、上^ケへし、け上^ケと見へ候様^ニ、鞠にせいをあらせて蹴るなり、三尺にても高足、一丈にても土鞠と心得へし、

とめ候事、けとめ、請とめとて、二ツ有、又、けぬきといふ事有、是は高足を定足にけぬく事なり、

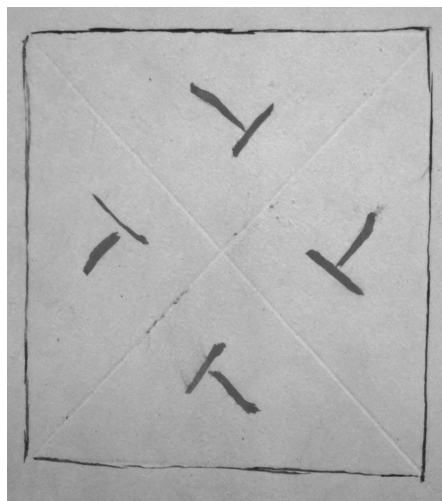
身に勇をあらせて、氣に力を入候事、第一なり、

身のちからの入候事、りきみなり、氣のたるむ事、拍子ぬけ候もの也、

初ての上^ケ鞠ハ、なる程氣をしつめ、ゆふ^ニ上るものなり、又、鞠中は上、鞠せいてまハし、よくはやく上候もの也、其時、ゆふになど上^ケ候へハ、あらたまる物なり、初の拍子ぬけぬためにあらため候事、嫌ふ也、然ゆへに、すくい鞠、第一用心也、

鞠落すと見ハ、脇より声をかけへし、声を懸候へハ、情出て落さぬ物なり、高足をけ上^ケ候は、庭の真中へ出、上候事よし、第一嗜むへし、

縦上^ケ度とも、合手のかたへ近寄候ハ、上^ケすに渡すへし、我との請とりの屋鋪構へ有、是を地割といふ、



か様に候也、他領へ入候ての高足ハ、我儘なり、然とも、我上^ケ候鞠は、とめて渡すものなり、高足にて渡すハ不仕付也、されは、他領にてもとめ候也、けんかく切、又ハさか鞠、なきれ鞠ならば、脇より出とめ申也、勿論、遠くてはこ

蹴鞠秘伝書

- 一、鞠蹴揚の事 口伝
- 一、止鞠の事 口伝
- 一、序破急の事 口伝

ありといふ声より外にいふ事は

まりのかゝりにせぬとこそきけ

右之條々、雖為 御家蹴鞠之深秘、依執心令相傳卒、向後於干他傳受之節、選其着用、以誓紙御許可有之也、

蹴鞠門弟

野条自休

判

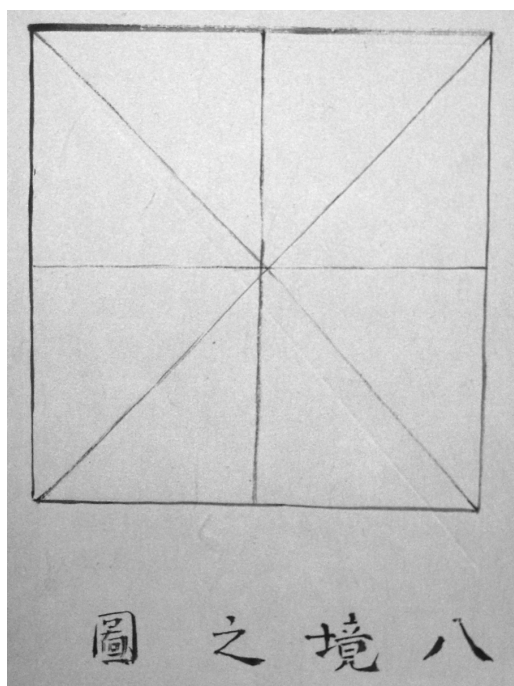
正徳元辛卯年十一月九日

右自休老ヨリ以誓詞傳之者也

蹴鞠門弟

田村源兵衛

當徳 判



此外、両分之図、対縮之図、横縮之図、傍縮之図、有之、

乾坤におゐて人と生れ芸能知らてあるへからす

ハウ 前也、秋の月の相あり、

貌 方角は西にして色ハ白し

カタチ

ヨウ 後なり、春の花にして

容 方角は東、色ハ青し

スカタ

先、鞠は大ふりにけるとも、又、小鞠に蹴るとも、百足に百あしつかふなり、左りをけは、さる鞠は、いつきてあしく大きに嫌ふなり、

鞠を見おろす事、第一也、鞠に目をつくるといふ事、右同前なり、

心にゆ断有まし、けはなし、人に渡すとも、目を付、請取たるを見て颯と開き申候事、残心といふなり、

心持てわたす鞠、はやく請取可申事、我身近き鞠なりとも、心さし見へぬ内ハ開くへし、其内に切替候はたすくへし、

鞠を打上たるとて、むさとあをのくへからず、鞠半分見候様ニ見上へし、

序の内、鞠落候ハ、手にとりて上ヶへし、いまた沓もそろハぬに、すぐひまり度く致候へハ、鞠そりてしまらぬ物なり、五六度も上ヶ直シ候へて後ハ、しま

り候物なり、沓、大概そろいたるに、手に取て上ヶ鞠すへからず、けしみ候てハ、大きに嫌ふなり、あらたまる心にて序にかえりくしけぬ物なり、

序の内、沓のいきわたらぬ内に蹴上ヶへからず、大概沓にみなのりたると見合候て、中足に上ヶへし、

序ハ成程ゆるやかにしつかなるかよし、中足より段々に見合、高足に上ヶへし、高足を上ては定足になをしく、暮を見合、暮もつまりたるとおもハ、引請

く上ヶへし、其うちにも、鞠の遠き人へは、けかけはねかけ、尤わたし鞠第一なり、

鞠くはり第一なり、四人まんへんなくけるやうにくはるへし、

鞠請取、たひくに同じやうに蹴る事嫌ふなり、三度請取候ハ、三色に蹴へし、様く曲を蹴候事にてはなし、定五ツ程つゝき候ハ、重てハ一ツか二ツ

一、序破急之事 附掛声之口伝

一、持鞠之事

一、鞠一段三足之事

一、同見おろしの事

一、鞠蹴上之事

附口伝

一、止鞠之事

附心の納様口伝

一、牆之高サ老丈五六尺にてもよし、但、垣は三方なり、大屋ねにてもひさしにても軒をとるものなり、軒なくは四方垣なり、軒下のみな網のものなり、場の松ハ相生の女松なり、相生の松なき時は常の女松也、又、四本なから竹はかりも植也、惣して場の内の四本懸の木の高サ二間ほど也、竹は下枝のつき候処より土際まで、七尺にても八尺にても不苦候、竹の枝数は五枝、又は七枝たるへし、柳はしたり柳なり、桜、楓はいつれにても植へし、松は二本松、三本松は大切のゆるしなり、四本松は平人にはゆるさず、歌に、

みな松の四本かゝりは位ある

人の立たる庭とこそきけ

但、右図のことく、いつかたにても軒を用て、かゝりの木植てよし、また歌に、

相生の松はいぬゐの物なれば

楓のかたはひつしさるなり

青柳は辰巳の角に立なれば

桜のかたは丑寅そかし

但、木と木の間、二間、木と垣の間、一間、右ハ四人縮の場なり、六人縮もくるしからず、此外、京間、四間半四方、五間四方、七間半四方、八間四方の場も有之、八間四方の場の時は、八人縮の物なり、地際より垣の高サ六尺は立子なり、木にても竹にても用なり、立子より上は網にても、但、竹木にても格子にてもいたし候、木の時は横さんに打なり、竹の時は常の堅格子なり、但、格子の廣サ四寸、網の目は三寸五分なり、垣の内、或は廣場にても軒下を通るへからず、歌に、

軒の下は鞠けぬとても横さまに

用ありとてもとをさらまし

一、木に着様の事、軒には貴人又ハ切者成もの着へし、歌に、
軒のかた上りなりけり何方も

かゝりによりて下りもそする

但、木に着様は、松よりは左、人よりは右なり、向縮も同事也、但、軒、貴人ならハつくぼうへし、又は鞠御見物貴人ならば、蹴鞠の者四人ともに同輩ならハ、残らすつくぼうへし、一番松、二番に柳、三番桜、四番楓、然るゆへ、四番目の下座のもの、揚鞠可致なり、

一、棹の事

長サ 歌に、

一丈も九尺もよしや鞠棹の

なかさのほとは二間なりけり

場の下座の楓の木の左の垣の根に、本を軒の方にして横に置也、口傳、

一、入鞠の事、下座に着者、鞠を地に置、右の手にてとり革をとり、左の手にのせて、相手の方に持出る、相手むかふより出合、其時、鞠を揚なり、真行草の口伝、

一、揚鞠の事、沓のかうにて蹴出し渡すへし、一足にて渡らざる時は、手に

とり、右の通に渡すへし、二ツ三ツ蹴ぬもの也、附渡し鞠は、沓下にて鞠

ちいさく足のかうへ軽くあてゝ、鞠色ゆるくして渡すへし、色能まはる鞠

は、人に渡りて蹴にくき物也、わたす時、鞠に心をうつして、相手の顔を

見て、跡へかえるなり、あとに位有てよし、鞠を、貴人のむかひ縮の者揚

る時、貴人へ向て揚ぬものなり、

一、請取鞠の事、沓下にて鞠をちいさく請取なり、数多きハあしきなり、

一、身持の事、附腰のすへやう口伝歌に、

立おほふすかたと云てさのみ又

かゝむもつらしのけそるもうし

一、沓下の事、強くやはらかにして、足のあからさるやうに蹴へし、口伝歌に、

身を近く足をはひきく揚とも

先あたらぬは下手の内なり

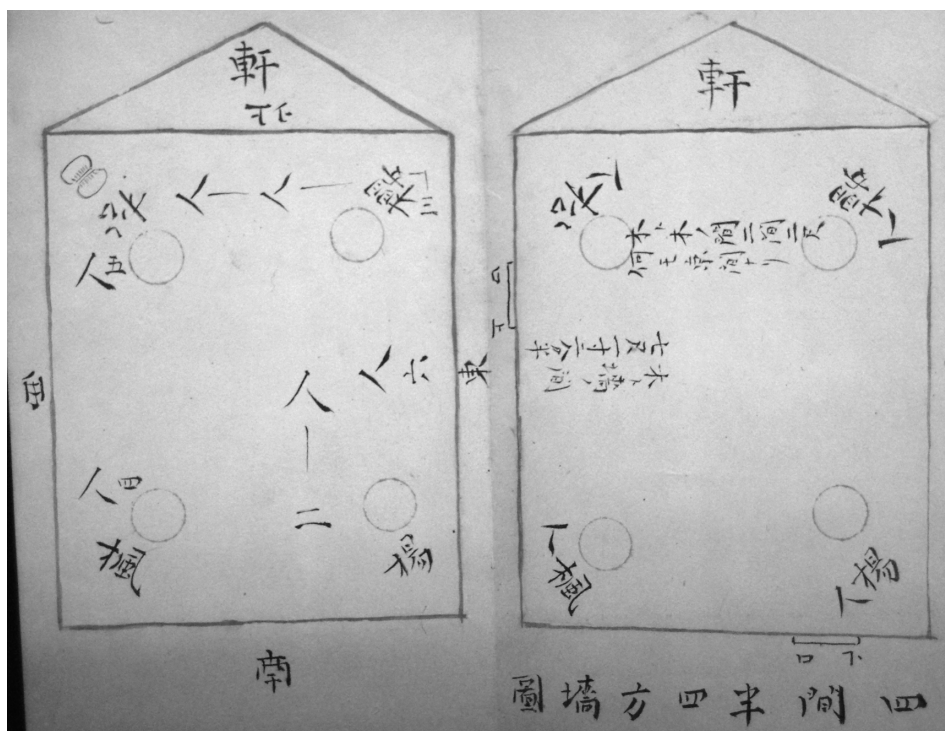
一、地鞠の事、六七尺ほど沓下にて、二足も三足も揃て蹴へし、五足と蹴ハ悪き也、鞠のあたり処、おやゆびの内のかたより、足のかうへむけ、あたれハ鞠音よくひゝく物なり、

一、一段三足の事、相手より請取鞠、自分の鞠、わたし鞠なり、口伝

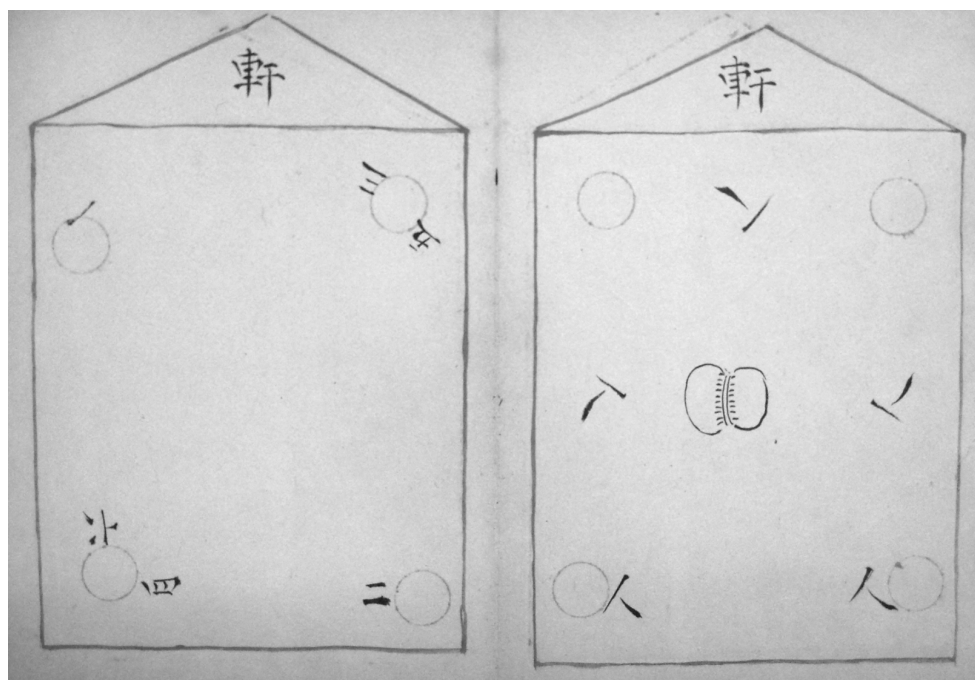
一、鞠見をろしの事、顔てりたるも悪し、うつむきたるも悪し、顔を居へて目八分に見をろすへし、

○相生ノ女松無御座候ハ、常の松にても能御座候、亦、四本なから竹も植申候、高サ二間ほど、松も高く御座候ハ、先をとめ申候、竹ハ猶以地際ヨリ下枝迄七尺ても八尺ても不苦候、竹の枝数は、五ツか七ツか能御座候、二本松、三本松ハ大切ノ御免ニ候、四本松は御家斗て御座候、

○此木ノ植様口伝



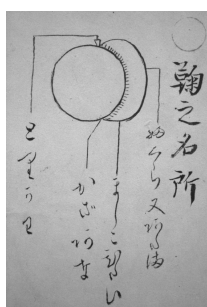
- 一、鞠牆之事
- 一、木に着様之事
- 一、棹之事
- 一、入鞠之事
- 一、揚鞠之事
- 一、請取鞠之事
- 一、鞠之身持之事
- 一、沓下之事



- 附田座着様、扇子疊紙之口伝
- 附棹の取まハシ口伝
- 附真行草之口伝
- 附渡し鞠
- 附腰のすへやうの口伝

一、京中之衙門通西洞院小社二座祭。申日、紀氏之人祭。年始之蹴鞠^二用伴日、此成道卿旧蹟也、

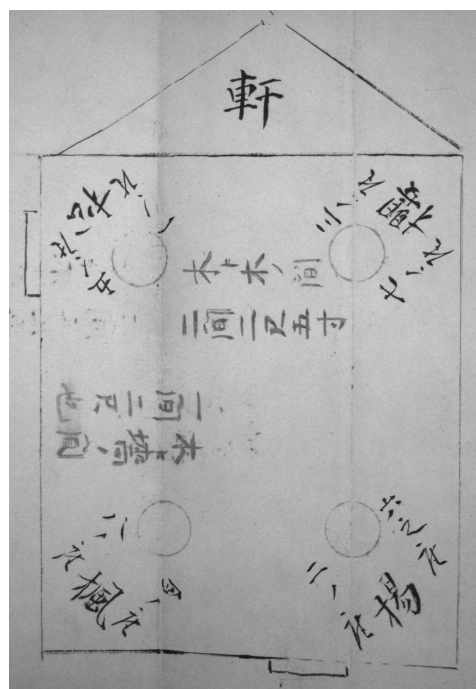
御家蹴鞠之條々



○鞠之名所

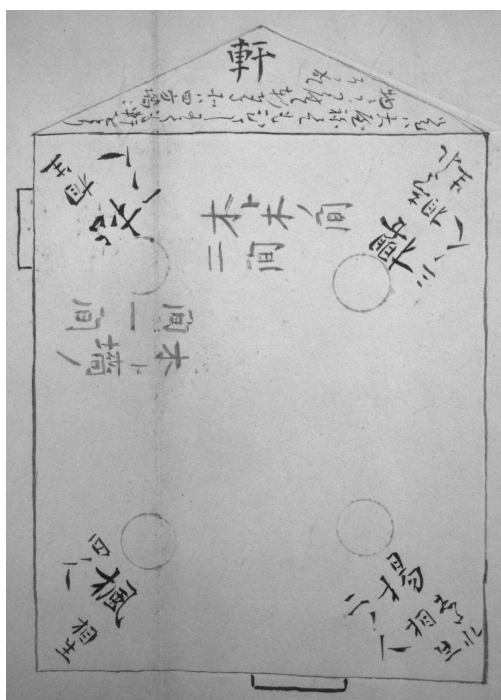
ふくら又あたま
ましこひたい
かざあな
とりかわ

八人縮之時也



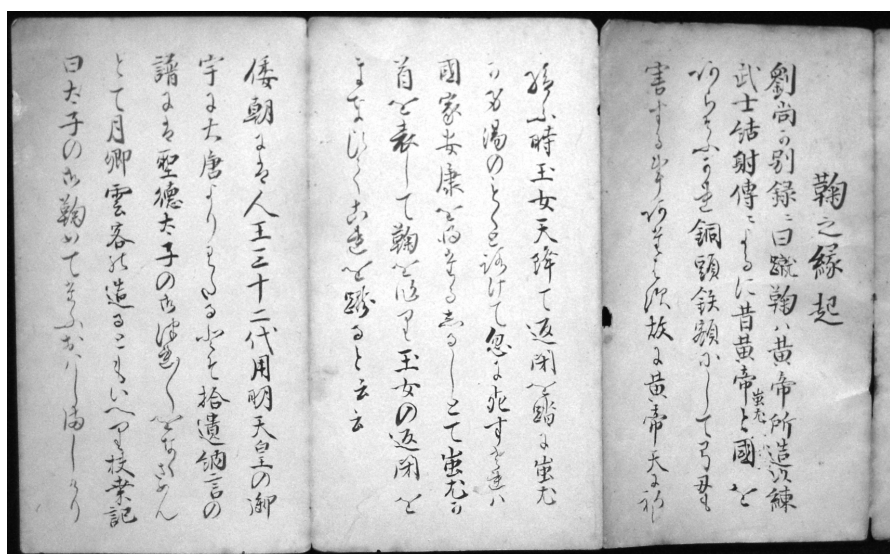
○四間四方墻之圖

四人縮又六人縮ナリ



『鞠之縁起』冒頭

鞠之縁起



鞠之縁起
劉尚別録曰蹴鞠ハ黄帝所造以練
武士結射傳之昔黃帝國を
つらふと銅頭鉄額かしてつるも
言すもつらふと放は黃帝天より

降ふ時玉女天降て返閉を踏は蜚尤
湯のとき返閉を踏は蜚尤湯のとき
國家安康をのたまふとて蜚尤
首を表して鞠を返閉玉女の返閉と
いふいふと蹴るといふ

倭朝は人王三十二代用明天皇の御
宇に大唐より蹴鞠を拾遺納言の
諸君も聖德太子の御宇に蹴鞠を
とて月卿雲客を造るもいへず
曰太子の蹴鞠を造るもいへず

翻刻

〈翻刻凡例〉

- 読解の便宜を考慮し、私に読点を付す。
- 紙幅の都合上、本文は追い込みとし、適宜私に段落を設ける。
- 原則として常用漢字を用いる。
- 誤字・脱字の箇所も原本のとおりとし、ママ等の注記は付さない。
- 図はそれぞれ当該箇所配置する。

劉尚か別録曰、蹴鞠ハ黄帝所造、以練武士、結射伝ふるに、昔、黄帝、蜚尤と国をあらそふ、かれ銅頭鉄額にして、弓刃も害する事あたはず、故に黄帝天に祈し給ふ時、玉女天降て返閉を踏に、蜚尤か身、湯のことくとりけて、忽に死す、されハ、國家安康を得たるしとして、蜚尤か首を表して鞠を作り、玉女の返閉をまなひて、これを蹴ると云、

倭朝には、人王三十二代用明天皇の御宇に、大唐よりわたるとそ、拾遺納言の譜には、聖德太子の御つれ／＼をなくさめんとて、月卿雲客の造るともいへり、扶桑記曰、太子の御鞠めてたふおはしましけり、朝のほと、一時は人もめされず、所をもさしまはして、ひとり遊しけるに、声は数十人か音のし侍りける、是ハ三世の賢聖達の遊しけるとそ申、其跡妙にかうはしきよし、しるしぬ、或曰、三十六代皇極天皇の御宇にも、唐土よりわたるといへとも、女帝成によりて、弄ひ給す、其後、三十九代天智天皇、大織冠と槻の木の下にてあそはしけるよりこのかた、聖主忠臣みな是を弄ひ給ふ事になりけり、

一、侍従大納言成通卿の鞠は、凡、先のしかたにはあらざりけり、彼口伝に、卿は鞠を好て後、かゝりに下立つ事、七千日、その中、日をかゝすとす事、二千日、若病に臥時は、臥ながら鞠を足にあて、大雨の時には、大極殿に行てこれを蹴る、千日のはてゝの日、引つくるひて、数三百あまりあけて、落ぬ先にみつから鞠を取て、棚を二まうけて、一の棚に鞠を置、二の棚にハやう／＼の供祭を取て、鞠を拝す、幣一本をはさみ、其幣を取て猶拝す、みな座につき、饗をすへて、勸杯の式有、三献の後、身の能を各奉る、五献に事終て、禄を賜ふ事、よろしき人には檀昏薄様、侍の輩には装束を給、事はてゝ、人々出ての後、夜に入て、其事を記せんとして、燈台を近くよせ、墨をする時、棚に置処の鞠、前にまろひて落きぬ、あやしう、やう有とおもふ程に、顔は人にて、手足身は猿にて、三四歳なる小兒程なる者三人、手つからかひて、鞠のくゝりめをいたきたる、あさましとおもひつゝ、何者そとあら／＼いへは、御鞠の性なりとこたふ、昔よりはほどに御鞠このませ給ふ人、いまたおはします、千日のはてゝ、様／＼の物給りて悦申さんとおもひ、又、身の有様、御鞠の事をも能々申されんに参たり、おの／＼か名をも知しめすへし、是を御覽せよとて、眉にかかりたる髪を押あけたれハ、一人か額には春楊花といふ字有、一人か額にハ夏安林といふ字有、一人かひたいには秋園といふ

『鞠之縁起』について

大島 由紀夫 *

(二〇一九年一月七日受理)

緒言

本稿で紹介する架蔵『鞠之縁起』は、近世後期に書写された蹴鞠に関する伝書の一つで、その内容は、「鞠之縁起」「御家蹴鞠之條々」「蹴鞠秘伝書」より成る取り合わせ本である。書誌を簡略に掲げると次のとおりである。

折本一帖 近世後期写

縦一〇・八cm 横八・八cm

外題「鞠之縁起」

内題はそれぞれ「鞠之縁起」「御家蹴鞠之條々」「蹴鞠秘伝書」

「鞠之縁起」の冒頭は、『蹴鞠口伝集』下巻に収載される『劉尚別録』『結射伝』を引用して蹴鞠の起源を説く記事^{注1}を簡略にまとめたもので、続いて本朝における蹴鞠の起源を「拾遺納言の譜」などを引きながら簡略に述べた後、『成通卿口伝日記』などに記される鞠精説話を初めとして、蹴鞠の伝書類^{注2}に散見する藤原成通に関するエピソードを記す。

「御家蹴鞠之條々」は、末尾に、

右之條々、雖為御家蹴鞠之深秘、依執心令相傳卒、向後於干他傳受之節、選其着用、以誓紙御許可有之也、

正徳元辛卯年十一月九日

右自休老ヨリ以誓詞傳之者也 蹴鞠門弟 田村源兵衛當徳 判
とあり、直後に八境之図を掲げて「此外、両分之図、対縮之図、横縮之図、傍

*人文科学系・日本文学

縮之図、有之」と付記するところから、正徳元年(二七一)に野条自休から田村源兵衛當徳に伝授された書の写しであることがわかるが、野条自休・田村源兵衛の両名については未詳である。文中に「是、鞠の繁昌のため、飛鳥井殿へ御奉公也」などと記されており、飛鳥井家流の末流に伝来したものであることが窺える。また、九首を掲げる和歌は、一部に字句の異同があるものの、いずれも『蹴鞠百首和歌』^{注3}に所収されるものである。

「蹴鞠秘伝書」は、「御家蹴鞠之條々」と内容の一部が重複しているが、身分の上位の者に対する作法・心得を記す条が多く、享受層を示す特色として捉えられる。

以上に概要を述べた本書は、近世期において末流の門弟からその門弟へと蹴鞠が伝授された様相を窺うことのできる資料の一つであり、鎌倉期以降に変容しつつ展開した蹴鞠の規則・作法・技法等に関する言説が、近世期に至って門流の末端ではどのように享受されたのかということを示す資料として相応の価値を有すると言えよう。よって、本稿では図と共に全文の翻刻を掲げる。

注

- 1 この起源説話については、村戸弥生『遊戯から芸道へ 日本中世における芸能の変容』(二〇〇二年、玉川大学出版部)で詳細に検討されている。
- 2 中世以前の主要な蹴鞠伝書については、渡辺融・桑山浩然『蹴鞠の研究』(一九九四年、東京大学出版会)を参照。
- 3 『続群書類従』第十九輯中(一九二二年、続群書類従完成会)所収。